

令和8年度 第1回大阪府スポーツ推進審議会 大阪府スポーツ推進計画部会 議事概要

日時 令和8年6月17日（水曜日）14時30分から16時30分まで

場所 大阪府咲州庁舎41階 共用会議室⑧

出席者 委員（◎部会長、○部会長代理）

◎木村 雅則	四天王寺大学 講師
○富山 浩三	大阪体育大学 スポーツ科学部 教授
中西 悠子	枚方スイミングスクール コーチ
永浜 明子	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
山口 志郎	流通科学大学 人間社会学部 教授
横山 久代	大阪公立大学 都市健康・スポーツ研究センター 教授

オブザーバー
大阪市 経済戦略局スポーツ部スポーツ課長
公益財団法人大阪観光局 経営企画部 企画担当部長

〔質疑応答等〕 □・・・部会長 △・・・委員 ■・・・事務局

1 開会

- 部会委員の二分の一以上が出席し、部会運営要領第4第2号に規定する定足数を満たし、会議が有効に成立していることを報告

2 議事

議題 第4次大阪府スポーツ推進計画の策定について

- （資料1により第4次大阪府スポーツ推進計画の策定について、資料2により部会及び関係団体ヒアリングにおける意見整理表を説明）

【議論①】

- △ 「持続可能なスポーツ都市」をめざすべきスポーツ像に加えたことで、非常に良い計画になっている。私はスポーツイベントによる一時的な盛り上がりのみならず、府民の日常に根差した形でスポーツが取り入れられているべきと考えている。大阪はインフラが整っており、活動拠点とするスポーツチームも多く、大阪マラソンなどのスポーツイベントも行われている。大阪にはスポーツに接する機会がいつでもあり、それが魅力のひとつであるため、これらをいかした大阪ならではの計画とすることが望ましい。
- △ 計画実現のためには、連携体制の強化が最も重要。加えて、医療者の立場から女性の骨粗しょう症の問題を踏まえると、女性には若い世代からスポーツに参画していただきたい。女性の実施率を高め、子育て期や働き盛り期の男女差をなくすことは非常に大切なこと。また、若い時からのスポーツ実施が高齢になった時の健康づくりに重要であることを、さらに周知、啓発していくため、医療関連部署との連携や、スポーツがより身近になるよう施設利用のシステム担当部署と連携するなど、計画のボトムとなる連携強化をしっかりと進めていけると

良い。

- △ 目標値等について、「あつまる」「つながる」を具体的にどの様に測るのか。
- 現行計画における参考指標と同様に、大阪府独自の調査で測ることを想定。
- △ 集まって話をするなど人とのつながりを実感することは、ウェルビーイングを実現するうえで非常に重要なポイントであり、府民がつながりを感じられるスポーツ環境がとても大事。例えば、スポーツ観戦者は、応援している人同士で言葉を交わさなくてもつながりを感じる（ファンコミュニティ）。大阪マラソンで一緒に走った人や、一緒に応援している人同士の見えないつながりなど、同じ場所を共有することによるつながりも、ウェルビーイングにつながるのではないだろうか。同じ場所を共有することで、つながりから安心感を実感できウェルビーイングにつながるような内容を指標に入れてはどうか。
- △ 「スポーツをきっかけに居場所ができた府民の割合」を「スポーツを通じて新たな人間関係ができた割合」とする方がわかりやすく数値化しやすいのでは。
- △ 全体構成（案）は前回より分かりやすくなっている。パラスポーツの推進とするのか、インクルーシブスポーツと表現するほうが良いか考えていただきたい。
- △ 計画実現のためには、連携体制の強化は重要。2015年にスポーツ庁がスポーツ部門をまとめたように、東京はオリンピック・パラリンピックをきっかけに、スポーツをスポーツ局に一元化した。スポーツとパラスポーツを管轄する課が違うことで連携体制強化が進まないのではないかと感じる。
- △ 部会及び関係団体ヒアリングの内容が今回の案に的確に反映されているとの印象。1点スポーツツーリズムに関して、地域に負担がかからない方策を考えることが必要との意見があった。現状、スポーツツーリズムは誘客と地域活性化の視点が中心になっている。今回の計画では、持続可能性が重要なキーワードになっているので、地域住民の視点もスポーツツーリズムの推進において重要となる。スポーツツーリズムを推進するだけではなく、地域住民がそれをどのように受け止め、地域の資源や価値をどのように支えていくのかという視点を計画に明記することで、持続可能なスポーツツーリズムの推進につながるのではないかと。
- △ 委員や関係団体の意見に共通するキーワードは、「持続可能性」「子どもの頃からの積み重ね」「人とのつながり」「障がい者と健常者がともにスポーツをする」などである。連携体制の強化は、とても大事なことで今後の課題。本論を作成する中で課題を克服するような内容にしていただけたらと思う。

【議論②】

- △ 「スポーツをきっかけに居場所ができた府民の割合」について、居場所という表現が一部理解しにくいと感じる。帰属感のような場所だけではなく、スポーツを介して感じられる人とのつながりや様々な人が共にスポーツに取り組めることがスポーツの大きな価値の一つであり、それを指標とするには、様々な人とのつながりという方が近いと感じる。
- △ 「する」「みる」「ささえる」の参画率は、100%をめざすべきであり、その目標達成に向けて努力することが重要。
- △ 居場所は、継続的にそこに出入りするイメージがあるが、そこに1日いて、何か安心感を得た等も含めるとよい。

- △ 目標値について、「する」「みる」「ささえる」の参画率を 100%とすることに賛成。なお、スポーツ観戦率について、「テレビで見た」「直接見た」等も含めるとともに、「スポーツイベントに参加した」などの関わり方も入って良いのではないかと。
- △ 国の世論調査の分母は毎年同数か。
- 例年、40,000 人を対象とした調査であり、分母は同数。
- △ スポーツ実施率、スポーツ参画率の減少は深刻。居場所ではなく、「スポーツを通じて新たな人間関係ができた」の方がしっくりくるのではないかと。目標値について、「する」「みる」「ささえる」の参画率を 100%とすることに賛成。
- △ 大阪府独自の視点から「あつまる」「つながる」を参考指標に設定するのはとても良い。スポーツ庁の令和 7 年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」では、Q34「どんなきっかけや動機づけがあれば運動スポーツを支える活動を行ったり続けたりすると思いますか」がある。議論に挙がっている「地域での居場所、役割、出会い」が 9.8%、「出会い交流の場」が 9.9%という形で、スポーツと人とのつながりが意識された項目はスポーツ庁でも設定されている。一方で、この項目はスポーツを行うための動機を把握する項目であり、実際につながりが生まれたかを国としては把握していないことが推察される。大阪府独自の調査を行うのであれば、「スポーツを通じて新たな人とのつながりができた」は非常によい。また、例えばソーシャルキャピタルなどの項目では、「スポーツを通じて友人とは親しくしている」や、「スポーツでつながる友人とは親しくしている」といった項目もある。こうした項目は、スポーツイベントやスポーツツーリズムの実施等、あるいは地域住民を対象とした調査において活用することで、人とのつながりや社会的な効果を把握するうえで有効であると感じる。
- △ 「スポーツをきっかけに居場所ができた府民の割合」について、居場所には物理的な居場所と精神的、心理的な居場所の意味がある。この居場所は、人によってイメージは異なる。スポーツを楽しむことによる充実感、満足感の意味での居場所が大事であり、居場所という表現は残っても良いのではないかと。ただし、居場所に加え、人とのつながりが生活範囲を広げる等、達成感につながることから、「つながる」というキーワードも参考指標に入れるとより分かりやすいのではないかと。

■ （資料 3 により第 4 次大阪府スポーツ推進計画（骨子案たたき台）について説明）

【議論③】

- △ 第 2 章の「4 スポーツに係る言葉の定義」について違和感がある。計画において、生涯スポーツ、レクリエーションスポーツをどのように位置づけて、どのように推進していくかを決めていく理解でよい。
- 前回の部会において、言葉の定義付けをすることで計画の精度が上がるとの意見をいただいた。国が定義付けする言葉も参考に、大阪府として「万博レガシー」「生涯スポーツ」などの言葉を定義することで、計画がより読みやすく、多くの人に理解していただけるものになりたいと考えている。
- △ 生涯スポーツとレクリエーションスポーツは、同じ土俵にあるものではない。生涯スポー

ツは、人生において、ウェルビーイングの実現のため、継続的にスポーツに関わっていくという意味、まさに計画の骨子になるもの。レクリエーションスポーツは、スポーツをする目的で競技スポーツと対比的なところに置かれ、楽しみや交流のためにするスポーツ、つまり、どういう目的とするかの捉え方のひとつであり、広くスポーツをする中の選択肢のひとつであると思う。スポーツが苦手な人が必ずしもレクリエーションスポーツを好むかという、そうではなく、レクリエーションスポーツをやってみたら競技スポーツの方が面白いと感じる人もいるだろう。その人が何を好んで、あるいは何を目的にスポーツをするかは様々であり、選択肢が多いことは非常に良いことであり、レクリエーションスポーツも含め、機会が設けられていることが重要。必ずしもスポーツに対してハードルを感じている人の入り口や突破口がレクリエーションスポーツとなるわけではないと感じている。

- △ めざすべきスポーツ像について、「持続可能なスポーツ都市」のイメージが、皆さんの中で共有できているか、見えにくいと感じる。「全ての人がウェルビーイングを感じられるまちへ」についても、第3章、第4章が実現すると、どうウェルビーイングが実現するののかも少し見えにくい。例えば、「ライフステージに応じた機会の提供」では、子どもの頃にソーシャルキャピタルが高まる経験をして様々な大人との人間関係ができている子どもは、大人になってもウェルビーイングが高くなるとの研究結果もある。つまり、子どもの頃にスポーツをすることで生涯のウェルビーイングにつながられるというような、一つひとつがウェルビーイングにつながっていくというような見せ方があって良い。ウェルビーイングは様々な側面があり、例えばキャリアや人間関係、経済的な部分や身体的な部分、そしてコミュニティという5つの要素がウェルビーイングを測定する指標と言われている。スポーツでは人間関係や身体的な部分、コミュニティの要素で関係が深いと考えられるので、ウェルビーイングが何を指すのかを冒頭でしっかり定義したうえで、この一つひとつをそこにつなげていくような見せ方やストーリーとなれば良い。
- △ 第4次計画で最もすべきことは、万博レガシーからワールドマスターズゲームズ 2027 関西（以下、WMG）につなげること、つまり、万博レガシーで何が残って、それをスポーツにいかして素晴らしい WMG につなげていけるか、1章設けるくらいの勢い。また、今大阪にある資源と、このビッグチャンスをつなげるストーリーがどこかにあると良い。それ以外は、今までから継続していることなので、それがどうウェルビーイングにつながるかを示していくことが必要。キーワードは、WMG、万博レガシー、ウェルビーイング。
- △ 基本理念には「楽しい都市へ」とあり、現行計画の「楽創都市」から引き継がれている部分もあるので、「楽しいスポーツ」とは何だったかと、現行計画の評価も入れていく必要があると感じる。また、府民のウェルビーイングなのか、来阪者にウェルビーイングを高めてもらうのか、両面あると思うが、スポーツツーリズムであれば来阪者にウェルビーイングを高めていただくと同時に、それを通して府民のウェルビーイングをどのように高めるかということも考える必要があるのでは。スポーツコミッションからスポーツツーリズムにつながり、ウェルビーイングにつながる。加えて、横の連携も課題。
- △ 「4 スポーツに係る言葉の定義」の「生涯スポーツ」「レクリエーションスポーツ」に少し違和感がある。加えて、「第5章 スポーツ施策の推進体制等の強化」が重要と感じており、

良い取り組みをたくさんしていただいているのに、それが情報発信されず、府民が知らない状態になるのは残念。あとは連携の強化と財政、この3つはとても重要。また、万博レガシーをどのように WMG につなげていくかは大事であり、いかに連携させて万博レガシーをどのように伝えていくか、使えるものは全部使っていく、つまり、情報発信はすごく大事だと感じる。

△ 第3章、第4章では各重点項目でめざすべき方向性がかなり明確になった。特に以前の資料だと因果関係が明確でなかったが、各項目が因果関係に沿って整理されている点は良い。一方で、第4章を第3章と比較すると、大阪マラソンや WMG といった事業ベースの整理が中心になっているとの印象。スポーツツーリズムやスポーツイベントについては、交流人口の拡大や経済効果が重要になるが、加えて、地域の社会的価値も重要と考えている。大阪府市都市魅力戦略推進会議において、観光を推進するうえで市民のシビックプライドの醸成について盛んに議論されている。大阪・関西万博がまさにイベントを通じてシビックプライドが醸成された代表的な事例であり、多様なステークホルダーや府民、市民が共創しながら作り上げている点が大きな特徴である。連携体制の強化が重要という話もあったが、そこに市民と一緒に作り上げる共創性が非常に大事と感じる。人を呼び込むだけでなく、地域の価値を高めるという観点から、共創の視点についても、第4章第2の柱であるスポーツツーリズムやスポーツイベントの推進に盛り込むと良い。

△ 第3章の文言について、何々による何々と書くと焦点が2つになり、どちらがメインかわかりづらい。心身の健康がメインなのか、共生社会の実現がメインなのか、スポーツ環境づくりが大事なのか、焦点が2つあるように感じる。また、第3章に「4 スポーツコミッションによる生涯スポーツの推進」、第4章に「2 スポーツコミッションによる活力のあるまちづくりの推進」と、スポーツコミッションによりふたつのことを実現しようとしているが、わかりづらい。生涯スポーツの推進のための手段としてスポーツコミッションがあるのであれば、生涯スポーツの推進を打ち出さないと、何がしたいのかわかりづらいと感じる。

■ 検討させていただく。

△ 因果関係も大事だが、目標とその手段に分けた方が分かりやすいのでは。例えば、スポーツに親しむ機会をいくら創出しても、そこに参加しなければ心身の健康はなしえないので、心身の健康を目標にしたときに、どのような手段があるのかという見方になるのではないか。

△ 子供の頃から運動することは、生涯スポーツに向けた取り組みのスタートとして非常に大事。しかし、どうしても途切れてしまう場合がある。例えば、南の地域ではラグビーが盛んではないが、ラグビースクールはとても強い。スクールに通う子どもがラグビーを続けようすると、地域の中学、高校にラグビー部がなく一度途切れてしまう。高校でラグビーをしたいとなれば、北摂地域に通う。つまり、子どもの頃からスポーツを楽しみ、途切れないようにといった内容をライフステージに応じた機会の提供などにしっかりと入れて欲しい。例えば、中学校の部活動の地域展開が進められているが、中学校や高校では、クラブの指導者がおらず、クラブが消滅している現状がある。そこで大学生を活用する。大阪狭山市は、今年から部活動の外部指導者を推進していくため、大学へ学生指導者の派遣を依頼している。南の地域では、大阪体育大学があり、中学校教員や高校教員をめざす大学生に協力してもらい、

子どものスポーツ活動が途切れることなく、生涯スポーツにつなげていけるような、そんな表現が計画にあると良い。加えて、「人とのつながり」、「スポーツのつながり」もキーワード、計画本文策定の際には考えてもらいたい。

【その他ご意見】

- △ 第3章において、重点項目「1 ライフステージに応じた機会の提供」「2 スポーツに親しむ機会の創出による心身の健康」に WMG が記載されている。スポーツに親しむ機会の創出による心身の健康、これは WMG が開催され、機運が醸成されることで、スポーツを親しむ機会が創出され、健康が実現する内容となっている。大事なことであるが、これをどこか1か所逆にして「ワールドマスターズの機会をいかして」としてみる、WMG が開催されるのはまたとない機会であるため、この機会を成功裏に導くため、子どもたちに生涯スポーツ教育をする機会になるなど、そして、大人はこれらを見てより元気になっていく。視点を逆にすることで、新しい何かが見えてくるのではと感じた。すべて逆にはならないが、第3章1の柱の重点項目5として追加するか、第4章も重点項目5を作成し、逆の視点を見せることで面白い計画ができるのでは。
- △ この柱は、これまでの計画においておおむね実施してきており、万博レガシーと WMG をタイトルに出して、府内小学生の万博招待があったように、WMG においても子どもが役割を担って参加するなど、関われるような仕組みがあると良い。また、連携体制の強化の項目について、具体的な取組みを記載することで計画がより実現可能性のあるものとして広く府民に知ってもらえるのではないかな。
- △ 子どもが元気になれば保護者、大人も元気になり、やってみようという気持ちにつながってくるのかもしれない。そんな視点も必要。
- △ WMG はあまり周知できていないと言われているが、マイナススタートだと伸びしろしかない。これを子どもたちに周知し、子どもたちが自分の住む市町等で来年、こんな大きな大会が行われることを勉強して保護者に話すことで、保護者が出てみようという気持ちになればなお良い。
- △ 参考資料として第4期スポーツ基本計画の作成について中間報告素案があるが、重点課題3では地域スポーツ資源の活用が掲げられている。その中ではスポーツツーリズム等による地域活性化に関して、担い手となる組織基盤の強化や人材育成についてスポーツ庁で盛んに議論されている。骨子案たたき台では、そのような人材育成に関する記述があまり見られない印象を受ける。地域住民や民間企業とともにスポーツツーリズムを推進するうえで、府として人材育成に関する考え方や取組みについて、計画の中で触れても良いのではないかと、国の動向を踏まえて感じた。
- △ 財源の確保について、クラウドファンディングなど色々と方法を検討できるのでは。

【オブザーバーの意見】

- ・大阪観光局として意見を述べさせていただく。全体構成（案）について、スポーツツーリズム事業を進めていくうえで、骨子案たたき台第5章が最も重要。情報発信とは何の情報なのか、

大阪の特徴のひとつはプロスポーツが盛んであることであり、それが都市ブランディングにつながるため、情報発信には一層力を入れるべきだが、大阪観光局においては財源に限りがあるため実際は難しい。プロスポーツチームは、各々でお客さん呼び込むための様々な取組みをしており、我々団体に何を求めているかという点については金銭的な支援や収入増につながる取組の連携。チームにお金が入っていくような提案ができるよう、チームとコミュニケーションを取りながらプロスポーツチームを活用したブランディングをしていくことが必要。連携体制の強化については、まちづくりと言う以上は、スポーツと観光、都市政策、建築都市の部署、土木系、産業、プロスポーツチーム、メーカー等との連携が必要であり、インフラ整備が必要となる。例えば、アウトドアアクティビティは競技性の強いスポーツとは違い、道路や山林、河川等のアウトドアのフィールドスポーツを楽しむやすい環境（安全面、情報面など）を整備すれば自然と楽しんでもらえると考える。また、環境整備したことをPRすることで裾野が広がっていく観点も必要。

- ・大阪市においても、スポーツ振興計画を作り、スポーツ実施率の向上やスポーツをきっかけとしたまちの魅力、都市格を上げていく取組みを進めている。そのような中、府とともに大阪マラソンや来月実施されるバレーボールネーションズリーグ 2026 大阪大会等、様々なスポーツ大会の招致開催に取り組んでいる。本日議論のあった目標値の設定について、「あつまる」「つながる」の指標をどのように測っていくべきか、同じ悩みを抱えている。議論を聞く中で「人とのつながり」が特に重要と感じたところであり、市としても計画に反映させていきたい。

3 閉会

- 次回の部会は、8月26日（水）の開催となる旨説明。